BOOK REVIEW

消費者と生産者の連帯による変革の時代

『消費者運動―その軌跡と未来』

下垣内　博　著

本書は一九九二年一〇月に亡くなられた下垣内　博（しもがいと・ひろし）氏の遺稿集である。下垣内氏は大阪消団連（全大阪消費者団体連絡会）の事務局長として大阪、関西はもとより全国の消費者運動に大きな影響を与えた人であった。「消費者問題」をめぐっては、各都道府県・市町村において各条例が制定され、消費者センターが設置されてはいる。しかし、そこで定義される消費者問題とは「使用価値や価格に問題がある商品が無知な消費者に販売されているという不公正な取引問題」に限定されており、したがって「消費者運動」の課題も、商品に対する正しい知識を得ることに限定されて理解されているのが現状といえる。

その中で本書は、消費者問題を「生活の上で発生するあるいは起こり得る可能性の消費者被害と権利侵害のすべて」と広く定義し、現代資本主義制度の構造的なしくみがもたらすところのものとして消費者問題を捉えていた点が、類書にみられない特徴であるといえる。

そのことは、本書において、情報公開、マスコミの現状、食糧輸入、消費税、独占禁止法、石油の円高差益還元、など消費者のくらしにかかわる問題に対して多様で多面的な展開を行っている点からも明らかである。

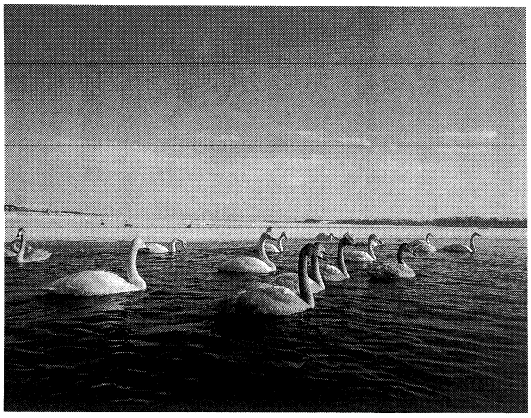
また本書では、下垣内氏が早い時期から地球環境問題をも視野にいれた活動を行っていたことが読み取れる。それは、消費者運動を構成員の利益のためだけの運動として捉えるのではなく、現代資本主義の下で全世界に発生している森林伐採、戦争、飢餓などの問題と消費者の生活とは不可分のものとして捉える下垣内氏の基本認識からきていると理解できる。

本書は二部一四章から成っているが、そのなかでいくつか重要であると思われる点を指摘しよう。

まず日本の企業が国境を越え、環境問題を含めた消費者問題を引き起こしている現状について、その被害をくい止めるには国際的に連帯してゆくしかない、として諸団体と取り組んでいる点である。（第一部のⅣ　消費者運動の国際連帯について）。このことは、発言しながら行動しない日本人の団体・個人が多い中で、下垣内氏の主張と実践は光彩を放っている。

また、環境問題については、日本人自らの加害についての責任を果たさずに主張しても駄目だとしている。（第一部のⅢ　消費者運動としての生活協同組合）。日本の戦争責任も含めて、われわれが常に念頭においておかなければならない点であると思う。そして、「地球規模で考え、地域で行動しよう」「未来を考えよう、しかし行動は今」と提起していることが注目される。生活協同組合運動のみに、その期待を多く寄せていることについては若干の疑問が残るが、環境問題を身近な課題として意識しずらいなかで、本書では自分の足元からの実践を提起している点が注目されよう。

下垣内氏が亡くなられた後で、日本農業をめぐっては、乳製品、



でんぷんなどの完全自由化、コメの部分受け入れ、食管制度解体という動きが急速に進んだ。こういった現段階において、日本の消費者と生産者が受ける影響と被害は同じであり、そこからまた、消費者と生産者との連帯による変革が消費者運動の最重要課題として浮き彫りされている。（たとえば、リンゴの輸入をめぐっては、消費者の選択肢がひろがったのではなく、安全性に問題のあるリンゴを子供たちが食べることになり、農家は病虫害の危険にさらされることになる、と読みかえることによって連帯の可能性が開けてくる）。

その点では、国際的な連帯とともに、国内の各階層との連帯の可能性が消費者運動の課題として提起されるべきであろう。

本書は、遺稿集としての性格上必ずしも体系的なものではなく、一部重複している記述も見られる。しかし本書は、二一世紀を目前にした国民諸階層がもたらされている問題に対して実戦的な課題を提起しており、多くの人に一読していただきたいと思う。

（大月書店発行
一九九四年一〇月刊。定価 二、三〇〇円）

評者
市立名寄短期大学 講師
佐藤 信

essay

農家が主役
―あぜみちの会の試み―

福井県農林水産部農業技術開発普及室
参事 玉井 道敏

「会」、設立前史

一九八九年の初冬、農業試験場経営技術課主催で毎年恒例の農家を主役とした経営研究会を開催した際、夜、酒を酌み交わす中で、若手農業者のリーダーである安実正嗣さんから「我々の大先輩として尊敬している中川清さんの語録を是非とも本にまとめてみたい」という投げかけがあった。この提案は、普及所勤務時代中川清さんと面識のあった経営技術課朝日研究員の想いとも共鳴し、彼からも「是非やってみましょう」という力強い意思表示を受けた。

年が明けて、朝日研究員と私の二人で中川清さん宅を訪問し、「是非、中川さんの本を作りたい。編集作業は、我々の手でやるから」ということを伝え、どうにか承諾をいただいた。

そこで早速、その編集母体を作るため農家を主役としながら（農家の人選はいいだしっぺの安実さんに依頼）、農家八名と支援機関の七名からなる『中川清氏の出版を支える会』を三月に発足させ、すぐに既存原稿の収集等の作業に入った。この支える会の誕生が、「あぜみちの会」前史となる。

『あぜみちのシグナル』出版